

滝と文覚そして囲碁

碁楽連理事 刀根 正樹

「梅の香や 滝の呼ぶ声 しみじみと」

早春の朝、会社に行かず旅に出た。駅の売店でカップ酒を買い、横浜線で南に向かった。平和な風景が流れ、遠く富士がほほえむ。行くあてはなかった。バッグから詰碁集を出し、頁をめくったが、気がのらなかった。

白い滝の姿が、ふと脳裏に浮かんだ。洒水(シヤスイ)の滝。神奈川西部の名瀑で、日本の滝百選に入る。ガイドブックの写真では、女性的で優雅な姿をしていた。文覚上人がこの滝に修行したと記されていた。私はこの時、滝の呼ぶ声を聞いたのかもしれない。なにやらうれしくなり、恋人に会うように心がはずんだ。町田で小田急に乗り換え、西に向かうと丹沢の山並が私を招いていた。

小学生の時、私は両親と大阪の箕面の滝に旅したことがある。めくるめく紅葉の中に、雪のような白い滝が悠然として人々を迎えていた。ここは聖地で、役行者が滝に打たれ、真言秘法を大悟したとある。その後、彼は全国の高山をめぐり、富士に西暦 633 年に登頂したという記録があり、これは世界で最古の登山といわれる。

私は箕面の滝から神戸に帰宅して間もなく、太平洋戦争の空襲を受け、火の海の中を逃げまどった。それは箕面の紅葉と同じ色をした炎熱地獄だった。死なずにすんだのは役行者の守護があったかもしれない。

松田で御殿場線に乗り換え、山北駅で降りた。駅前の観光ガイドで地図をもらい、とぼとぼと歩いた。やがて酒匂川のほとりに出た。広大な河原にゴツゴツした岩石がひしめき、これも地獄のような荒涼とした風景である。「地獄門」というカンヌ・グランプリを得た映画があった。長谷川一夫演ずる遠藤武者盛遠は、人妻の袈裟御前に恋慕し、わしのものになれと強要した。京マチ子の袈裟は、夫を殺せばいうことを聞くと答えた。盛遠は夫の寝所に忍び込み、太刀をふるった。月光の下で確かめた首は、何と袈裟のものであった。盛遠は苦しみもだえ、仏門に入り文覚上人となった。洒水の滝でも百日の修業をしたという。

『地獄を抜け天国に到るか。そこで待つ滝は天女か羅刹か』私は汗をぬぐった。やがて滝の入口の案内板が見えた。滝から落ちる川に沿って、細い歩道があった。初めは平坦であったが、やがて少しずつ登りになり、歩くにつれ、次第にきつくなって行く。滝はなかなか姿を現さなかった。私は焦っていた。恋人に会えぬ気持ちに焦らされていた。

上人修行の地という碑が見えた時、それは突然襲って来た。目のくらみ、呼吸困難、心臓の痛み、かつて味わったことのない苦痛である。私は路上に腰を落した。何やら重いものが心身にのしかかる。それは死霊のたたりかと思った。深呼吸を繰り返し、体調が戻るのを待った。



文覚

わたしの胸の中へ、文覚が語りかけてきた。平家物語に登場する文覚とはどうもイメージが異なっていた。

「やよ翁よ。汝は平家の落ち武者か。野武士くずれか。どう見ても一流の人物ではないな」

「私は日々囲碁を戦っている。源平の武者よりは、戦場に出ることが多い、白兵戦はもちろん作戦をたて、全軍に号令する男だ」「戦場はたかが小さな碁盤の上ではないか。わしを見るがよい。女遊び人の頼朝を説法し、平家討伐に踏み切らせたぞ。歴史に名高い源平合戦の火付け役じゃ」

「罪なことを。平家は滅亡し、多くの人が死んだ。囲碁は戦っても血は流さぬ。あなたは地獄の鬼か」

「歴史はな。大虐殺者をたたえ、その名を後世に残すのだ。わしは袈裟を殺し、滝に打たれてそれを覚った。人を殺すことを恐れてはならぬ。大いに暴れるべきだ」

「なるほど。あなたは知らぬだろうが、信長やヒットラーは大虐殺をして、歴史を動かした。しかし後世の人は尊敬せず、一種の狂人だと思うだろう」

「ところで翁よ。何はともあれ滝を浴びよ。滝壺に入り、心身を清浄にし、修行せよ。すべてを投げ捨てて、ただ滝に打たれるのじゃよ」

「私は碁が一目強くなればいい。今更悟りを聞くとか、大虐殺魔になる気はない。日々囲碁を楽しめればいい」

「一目などケチなことを。名人、せめて院生をとれ。それに見たところ碁のほかに、まだ道はいくつかある。残された人生にまだ大いなる道はある。滝に打たれれば、それが見えてくる。滝に打たれ験力を得よ」

ふと梅の香がし、滝の音が聞えた。心臓が軽くなり、痛みも薄れた。私は立ち上り、ゆっくりと歩いた。山肌から霧のような黒い影が立ち上り、私について来る。文覚の霊であるうか。

やがて真白な滝が姿を現わした。それは女性の裸体に似ていて、官能的な肌を惜し気もなくさらしていた。落差 70 m。上流にはまだ二段滝があるという。「あれを見よ、袈裟が笑っておる。舞いながら、わしをよんでおる」

文覚の影は滝に跳び込んだ。文覚の黒い影と袈裟の白い肌がからみ合い、詰碁のような棋譜のような模様をくりひろげた。それは男と女のたたかいに見えた。やがて白光が輝き、黒い模様は消え去った。

付近に古い茶屋がある。地元の老女が声をかけてきた。「あの滝壺に飛び込む人が後を断たないので、通行禁止になっただよ」そういえ滝壺の手前に柵があった。「あの滝は御神体なのです。文覚様の時代よりはるか昔から足柄の神でした。今でも多くの観光客が参拝に来る。おかげさまで私も食べていける」

日光の華厳の滝は自殺の名所という。一高生藤村操が厳頭の辞を述べかけたのがきっかけである。「万有の真相は唯一言にてつくす。いわく不可解」今の私ならばどのような辞を残すであろう。「囲碁の深奥は唯一言には言えず。不可解の個所にも答えは存在する。理解できる部分も大いにある」

私はふと詰碁の本を取り出し、頁をめくり、思わずうめいた。そこに、文覚と袈裟、男と女のたたかい、睦みあう姿が浮かびあがって見えたのである。

「私は碁石の滝、詰め碁の滝、手筋の滝で禊ぎをしよう。新しい験力が得られるかもしれない。文覚よ、有難う」

「詰碁には 男女のからみ 流れ行く」

「美女の滝 われもんもんと 詰碁読む」

(碁楽連だより 3月号 第235号 2011年3月1日)